

2023年度チャレンジ講座(第13回)を実施しました

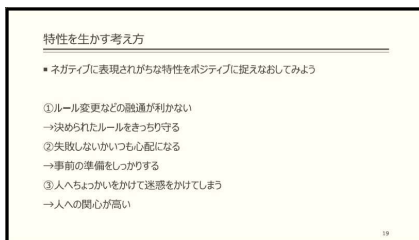
12月20日(水曜日)、第13回(文系第7回)のチャレンジ講座を実施しました。今回は、教育学部の古長治基先生に「発達障害の謎を紐解く」と題して講義をしていただきました。



まず、「発達障害とはどのような障害なのか？」について説明さ

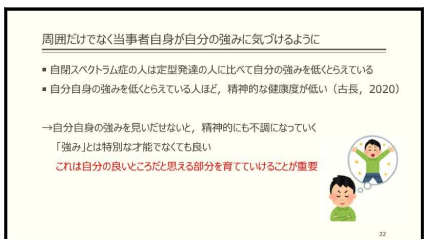
れました。発達障害とは、脳の機能が生まれつき偏っていることによって生じる種々の障害であり、現在は、「自閉スペクトラム症(ASD)」(＝対人面の障害)、「注意欠如多動症(ADHD)」(＝行動面の障害)、「限局性学習症(SLD)」(＝学習面の障害)の3つに分類されるそうです。

次に、教育的支援を必要とする児童生徒の増加傾向について説明されました。近年は、広域なスクリーニングや意識の高まり、診断基準の拡大などにより、発達障害が発見されるケースが増えているということです。ただ、その診断は非常に難しく、脳の異常箇所は未発見だそうです。



3つ目に、発達障害に対する理解について述べられました。「ニューロダイバーシティ(神経多様性)」という考え方にに基づき、それぞれの症状の特徴をネガティブに捉えるのではなくポジティブな解釈をすることで、その特性を活かして積極的に発達障害のある人を雇用しようとする動きがあるそうです。

また例として、自閉スペクトラム症者は非共感的であるという認識があるが、自分と似た人物を判断する場合は共感に関連する脳が強く活動したという研究を取り上げ、マイノリティであるがために非共感的と解釈されているだけであり、定型発達の人と違いはあるが、障害と言えるのか、という問題を指摘されました。



最後に、周囲の正しい理解と支援による、苦手克服だけではなく強みを伸ばす教育の大切な役割について述べ、講義を終えられました。

今回は21校301名の高校生が受講しました。感想の一部を紹介します。

- ニューロダイバーシティの考え方が世界に広がっていくことがとても大切だと思った。
- 生徒に質問しながら説明してくれたり絵や図をたくさん使用していてとてもわかりやすかったです。特別な教育支援を必要とする人が11人に1人の割合でいると聞いて、その中でもいくつかの症状があつて、それを理解する事やポジティブに考える事も大切だと思いました
- ASDの人が共感性が欠けているわけではなく、共感できる相手がいないだけだと聞き、今までのイメージは変わりました。これからもっとポジティブに考えていこうと思いました。
- 発達障がいの実態や課題について学びを深めることができ、特別支援教育に携わりたいという思いがより強固なものになりました。